常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年８月７日(金)号

◇ 慮る（おもんぱかる・おもんばかる）

１学期を無事に締めくくることができました。これもひとえに、保護者の皆様、様々な形で学校を支えてくださる地域の皆様のおかげと、感謝申し上げます。
ありがとうございました。　今後とも、ご支援のほど、宜しくお願いします。

８月に入り、体育館裏の常東ランドの森の音色が変わった。賑やかだ。
鶯（ウグイス）をはじめとする山鳥に代わり、蝉が主役の座をつかんだ。
時間によって声色も変わる。朝昼のツクツクボウシやアブラゼミが元気いっぱいに奏でる蝉の声は、夕方になると様相を変える。　カナカナカナカナ…
蜩（ひぐらし）だろうか、暮れなずむ景色と相まって、実に趣深い。
何より、蝉の世界でしっかり住み分けができていることに驚いた。

さて、７月末の会議の中で、資料を用いて教員としての心構えを再確認した。
その際に扱った毛涯章平(けがい しょうへい)の資料「教師十戒」を紹介する。

一、 子どもをこばかにするな。　教師は無意識のうちに子どもを目下のものと見てしまう。子どもは一個の人格として対等である。
二、 規則や権威で、子どもを四方から塞いでしまうな。　必ず一方を開けてやれ。さもないと、子どもの心が窒息し、枯渇する。
三、 近くにきて、自分を取り巻く子たちの、その輪の外にいる子に目を向けてやれ。
四、 ほめることばも、しかることばも、真の「愛語」であれ。愛語は、必ず子どもの心にしみる。
五、 暇をつくって、子どもと遊んでやれ。　そこに、本当の子どもが見えてくる。
六、 成果を急ぐな。　裏切られても、なお、信じて待て。　教育は根くらべである。
七、 教師の力以上には、子どもは伸びない。　精進をおこたるな。
八、 教師は「清明」の心を失うな。　ときには、ほっとする笑いと、安堵の気持ちをおこさせる心やりを忘れるな。　不機嫌、無愛想は、子どもの心を暗くする。
九、 子どもに、素直にあやまれる教師であれ。　過ちは、こちらにもある。
十、 外傷は赤チンで治る。　教師の与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。

長野県に受け継がれる「信州教育の教え」の一つである。私が校長を拝命した際も、教育長より『教師十戒の「教師」を「校長」に、「子ども」を「教職員」に代えて職務にあたりなさい』と教えを受けた。岡崎の教育現場でも、先人から脈々と伝授され、岡崎の教育を側面から支えている。
教育長の講話で気づいたことがある。教師十戒の「教師」や「子ども」は、他の立場にも置き換えられるということである。　大切なのは、相手を慮ること。

常東ランドのように、さりげなく相手に配慮できる関係でありたいものである。

ひとつの関係

宇佐美百合子

一方が傷つけば、もう一方に響く。

それが「ひとつ」ということ。

だから、

釘を打とうとして、げんのう を握った右手が

誤って左手の指をたたいても、

右手は左手に「ぼやぼやするな」って怒らないし、

左手は右手のことを 「何するんだ」って責めない。

それどころか

右手はすぐに げんのう を放り出して、

痛んだ左手の指をそっといたわる。

それは、

左手と右手が、もともと「ひとつ」だから。

すべての関係が

右手と左手のように 「ひとつ」に。

※げんのう:「かなづち」のこと